

青い壺

有吉佐和子

青い壺

有吉佐和子

青い壺

昭和五十二年四月十日 第一刷

著者 有吉佐和子

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

万一落丁・乱丁の際は、お取替えいたします

青い壺 目次

第一話		5
第二話		25
第三話		42
第四話		62
第五話		82
第六話		104
第七話		123
第八話		145
第九話		168
第十話		216
第十一話		238
第十二話		257
第十三話		279

装帧
坂田政則

青
い
壺

第一話

両手にポリバケツを提げて庭に出ると、鳥の声がした。亡父が好きで植えた椿と木槿なぐげが、見上げるほど高く育っている。椿は葉が繁って、探しても鳥の姿が見えない。一つのポリバケツには三分の一ほど水が入っている。もう一つには一杯に水が張ってある。省造は古下駄を鳴らしながら仕事場へ戻り、奥の棚から軍手をとって両手にはめ、プラスチック製の瓶を持つと、庭に出た。瓶には「フッ化水素酸」と大きな文字のラベルが貼ってある。劇薬という標示が目立つ。

蓋を開ける前に風向きを知ろうとして、庭木を見上げた。葉も花もない木槿の先が、わずかに揺れているかと思えたが、まず無風といていい。鳥の声が、また聞こえた。明るい日射しが庭一杯にひろがっている。浅く水の入ったポリバケツに薬液をこぼんこぼんと注ぐ。半分ほど入れて、瓶には丁寧ていねいに蓋をし、土の上に置いた。それから近くの縁側ひばきにたてかけてあった火鉢ひばきみでバケツの水を掻きまわした。水には少しの変化もない。色もつかず、臭いも立たない。

縁にひろげた古新聞に、数個の茶碗が並んでいた。省造はその一つを取り上げて無造作に水に浸けた。かすかに白い煙が上り、刺戟性の強い臭気が立った。省造は目をしばたき、右手で煙を払いながら、左腕の時計の秒針を読んだ。やがて火鉢みで茶碗をはさみ上げ、一杯に水を張ったバケツの中に投げこむ。呼吸は止めていたつもりだったが、煙を吸いこんでしまったらしく噎むせた。

「お父ちゃん、どないぞしたん」

妻の治子が台所から顔を出した。

「いや、ちょっと喉がいがらっぽになっただけや」

「古色こしよくつけてんの」

「見たら分るやろ」

「氣きィつけてな、お父ちゃん」

「大丈夫やて」

省造が茶碗を水から出して眺めているのを見て、治子は安心したのか台所へひっこんだ。

省造は次の茶碗を縁から取り上げると、前と同じ要領でバケツに浸けた。秒針を見る。また鳥の声が聞こえた。振返ると、木槿の先を揺らして黒い小鳥が飛立った。

鳥の姿を目で追ってから、腕時計に目を返して、慌てて火鉢みで茶碗を取り上げ、真水の方へ入れかえた。浸け過ぎが心配で、水の底の茶碗を見た。フッ素に浸ける前にあった釉薬ゆうやくの艶が全く失せている。しまったなあ、と省造は口の中で言った。

次からは鳥が啼いても気にするまいと思つたが、椿も木槿ももうひっそりとしていた。静かな庭先で、新焼きの茶碗が次々と釉うわぐすりの艶を落して水から上る。

仕事が終わると、フッ化水素酸の溶液は何倍にも水で薄めて下水へ流した。それからバケツに何杯も水を汲み代え、茶碗を素手で洗った。タワシを使って気のすむまで洗い上げた茶碗は、縁の古新聞に再び並べておいた。

省造は茶碗の隣へ腰をおろし、煙草を吸いつけたが、すぐ揉み消してしまった。心がたかぶっているのが自分にも分る。もう一本、吸いつけ、木を見上げて鳥を探したが、声も聞こえない。深く吸いこんでも心が落着かない。また一思いに揉み消し、深呼吸してから軍手をはめ直した。省造の窯は、家の辰巳たつみに築いてある。火は昨夜落していたが、窯の傍へ近づくだけでもう空気が熱い。

電気と薪の二種類の火を同時に使つて焼くのが、省造の案出した窯であつた。

窯の中にはデパートの注文を受けて作つた型物の壺八十点がある。だが、この日、省造がいつもより緊張しているのは、久しぶりに精力をこめて製作した一点物の壺が、同じ窯の中に三個入っているからである。

窯の蓋に手を触れると、軍手を通して熱が掌に伝わってくる。蓋を一枚引いて開けた途端に窯の中の熱が省造の顔に向かつて噴き出してくる。省造は、まっ先に中央の円筒型の壺を抱き上げた。胸がすぐ温かくなった。窯から一番遠い机の上に運んだ。釉の色が青く透き通っている。省造は、釉変が出ていないか、一個所でも色に濃淡が現れていないか、息を止めて探した。

「おい、治子。おい、治子」

省造は突然、妻を大声で呼んだ。

「はい」

治子は台所から縁先へ来て、そこからサンダルを爪かけると、窯場へ駆けこんできた。

「呼んだ、お父ちゃん」

「うん。これ、見てくれ」

「いやあ、あの壺やないの、お父ちゃん。美し色に上ったねえ」

「お前も、そない思ふか」

「こんだけ美しに青いの、久しぶりと違うんか、お父ちゃん」

「そやけ、お前を呼んだんや」

「形もええなあと思うていたけど、焼上ったら品ようになったわ」

「焼けば二割方小そうなるさかいよ。そやけど、ほんまに良え色にあがったなあ」

省造は軍手を脱いで、青い磁肌に掌を当て、いつまでも黙って撫でまわしていた。大声で妻を呼んだことも忘れていた。期待と幽かな自信は持っていたのだが、これほどの色艶が出るとは思っていなかった。

「お父ちゃん」

「うん」

「なんや今日は良えことのある日イやと思うてたんよ、うち。朝起きたときから、そんな氣イし

てたわ」

治子が唄うように言いたてるので、ようやく省造は我に返り、苦笑していた。

「お前は、いつでも良えことあってから言うやないか」

「そんなことないで、お父ちゃん。朝から思うていたけど、口に出して言やへんかっただけやし」

妻が言い返すのを背に、省造は軍手をはめ直し、窯出しを続けていた。八十点の型物の壺でさえ、一つ一つが微妙に色の違いを持っている。同じ釉薬を使っているのに、暗緑色の天竜寺青磁が一つだけ端に立っていたりする。省造は窯の中に整然と並んでいる壺を汗を流しながら次々と外へ出した。いつの間にか治子も軍手をはめて来て、省造の出した壺を黙って棚に並べている。

前には弟子を置いて手伝わせたこともあったが、省造の仕事ぶりが今の若者の気に入らないのか誰も長続きがしない。無理もないと省造は思っていた。自分も父の子でなければ、とうの昔に別の職業を選んでいただろう。

死んだ父親の名声に対する反撥から、省造は派手に名を売るとは極力避け、地道に製作を続けている。寺やデパートが配りものにする香炉や壺の注文などを引受けてさえいれば、ともかく親子四人が食べて行ける。弟子などとらずに一人で気楽にやるつもりになったところであった。子供が二人とも小学校へ通うようになってから、治子も手伝えることは手伝うので、人手にも不自由を感じない。

一点物は三つ。最初に取り出した経管と呼ぶ壺の他は、口の狭い平凡な丸壺と、透かし彫りを

あしらった耳付き。透かし彫りは小手先の芸がききすぎ、耳付きにしたせいもあって模様がうるさい。父親が生きていたらすぐ割ってしまうだろう。

そう思うと、省造は落着かなくなつて、窯出しを終えるとまっ先に透かし彫り耳付きを抱いて庭を突っ切り、北向きの小間に一つだけ運び出した。不出来とは分つても、精魂こめて轆轤台をまわし、指と掌で土を捏ね、撫で上げて製作した一点物には愛着があつて、とても割り捨てる気にはなれないのである。小さな床の間に、そつと耳付きを置いてみた。父親の目を盗んで飾っているような気がする。

すぐ経管も、丸壺も、気懸りになつて、庭に出て、一つずつ小間に運んだ。丸壺は床の間にのせても可もなく不可もない。経管を一個にして置いてみると、窯の前とは違つてしみじみとした喜びが胸にひろがってくる。

そつと襖をあけて、治子が背後から入ってきた。

「お父ちゃん、その壺やったら、花挿さんかて良えんと違う」

「この経管か」

「落着いてるし、気品があるやないの」

「お前も生意氣言うやないか」

「せやし、良えもんは誰が見たかて良えんやと思ふし、うちは」

ほればれとして経管を眺めている治子は、透かし彫り耳付きや丸壺の方は一言も褒めないのに省造は気が付いていた。そつと透かし彫り耳付きを膝脇へずらして置いた。

「お茶でも淹れましょか、お父ちゃん」

「頼むわ。喉、からからや」

治子が出て行った後、省造は小間の片隅に丸壺で透かし彫り耳付きを隠すように置き直した。経管とはまるで出来が違う。

子供用の駄菓子子を盆にのせて、明るい日射しを浴びた縁側で、夫婦は緑茶を啜った。

「ええ茶アやな」

「その筈やし、玉露やもん」

「おいおい、玉露をふだんに使うてるんか」

「吝なこと言いな、お父ちゃん。あんな上等の壺が上ったときぐらい、贅沢なお茶飲みましような」

「そらそうやな」

日溜りでザラメをまぶした塩煎餅を音たてて噛みながら、省造はさっき鳥の姿を見たと話した。「今年は春が早いんやねえ。鶯やろか」

「まさか。あの声は、ウソやったと思うわ。黒かったし、小さかった」

「ほな、天神さんから飛んできたんやね。鶯もウソも梅につく鳥なんやろ。お父さんが教えてくれはった。学問の学という字イの下に鳥と書くんやてなあ、ウソは」

「いや、学問の学から、子供とって代りに鳥と書くんやで」

「ああ、そうやった。なあ、お父ちゃん、お父さんが生きてはったら、今日の壺見てどない言わ

はったやろか」

「まだまだ褒めてはくれんやろ」

「そうやろか。そんなことない。きつと褒めてくれはったと思うわ、うち」

「お前のように甘い親なら、わしも苦労せんと気楽に茶碗などなんと焼いていたろかい」

二人は、しばらく、三年前に逝った父親をめいめいに回想して茶を啜っていた。氣にいらぬものは窯出しするとすぐ割っていた。一窯全部、粉々にしてしまったこともあったが、あれは割るだけでも随分くたびれたのではないか。

絵描きになろうか、陶器をやろうかと長い間迷った揚句、省造がやはり青磁一筋に腰を据えたとき、父親の方は七十近くなっていた。茶を飲みながら庭を見ていると、省造の最初の作品が父親の手で無造作に庭石で割られたときのことなど思い出される。

省造がこの家を飛出さずに、ともかく父親と一緒に暮すことができたのは、治子がいたからだ。治子は舅に大層氣に入られていた。

何杯もの茶を飲み終えたところへ、道具屋の安原が訪ねてきた。

「やあ、やあ。どうもどうも。奥さん、どうも、いつも御雑作です。牧田さん、どうですか景氣は。世の中はもうえらいことだっせ」

「そうらしですなあ。わしらは、まあおかげさんで、外の景氣と無關係で暮してますさかい、相変らずばちばちやってます」

「いや、その通り美術品は強いもんや、不景氣に。安物が、あかん。どこの窯元も、ばったり火

が消えたと言つてばやいてるけども、芸術一本槍でいつてる陶芸家はびくともしてえへんな。そういうものらし」

「わしらは芸術一本槍ともいつてませんけどねえ」

省造は苦笑しながら、縁側に茶碗を取りに行った。安原から頼まれたこの仕事は、およそ芸術とは正反対のものであった。

「もうでけてましたんか、大きに、大きに」

「このくらいで、どうですやろな」

「うまい。うまいこと古色ついたわ。これであんだ焼酎につけて床下へ入れとけば、半年で江戸初期というて通りまんねんで」

「江戸初期ですかあ」

「えげつない道具屋は土へ埋めるといふけどなあ、わしら、そこまではようせんわ」

安原は目を細めて、陶肌が艶を失ってしまった茶碗を一つずつ眺めた。

「これはまあ、うまいこといったなあ。牧田さんは、どないしてこない上手に古色つけまんねんな」

「それはちょっと時間よけに浸けすぎたんですわ。曇りガラス作るんと同じ理屈なんですなあ。釉薬に、細かい亀裂を入れるんです、薬品で。水の割り方と、浸けとく時間が、コツですねんけどな」

「それはそうですやろ、誰でもできることやないわ、ほんまに」

安原は、省造の古色をつける技術を褒めそやしてから、ついでに彼が商うと新焼きと言っても誰も信用しないのだという変な自慢をした。骨董の目利きと呼ばれている有名な茶人が、安原の納めた茶碗を、鼻高々で見せびらかしているという話もした。いつものことなので、省造は適当に相手をしていたが、急に相手は床の間に置いてある青い壺を見て、話を変えた。

「牧田さん、ええもんありますなあ」

「はあ、お目に止りましたか」

「お父さんの作品ですかいな」

「いえ、親爺のもんは飾らんことにしてますねん。あれはわしが焼いたものです。つい先刻、窯出ししたんですわ」

「牧田さんの作やてかい」

安原は無遠慮に床の間から壺を片手でおろして、畳に伏せてから眼鏡を外し、しげしげと見た。その様子では、どうも省造が茶碗を取りに行った隙に手に取って見てあったらしい。

「牧田さんのものにしては、判がないなあ」

「へえ、判は押しといたんですけど、釉薬をどっぷり使うたんで流れこんでしもうたんですなあ。見えません」

「どこから見ても唐物からもんやなあ。日本人のものには見えんがな」

「へえ。大きに。わしが言うのも妙なもんですけど、我ながら良う上りました。実は友だちの家が建て直して、古材が山と出ましたんで薪にもろうて来たんです。檜がよう枯れてましたさかい